

マサチューセッツ州におけるジャクソニアン運動

江川良一

【要約】 ジャクソニアンの実体の具体的解明の手段として、一九五〇年以降、殊に地方史的研究の分野において、注目すべき努力が払われて来た。ここに採り上げるマサチューセッツ州は、国内でも最初に産業革命という経済上の変化を経験しながら、なお政治的には保守主義の強固な支配下に置かれていた。この地のジャクソニアンの運動が南部や西部諸州のそれとは自ら異なった動きを示したのはむしろ当然であった。本稿では、この運動の盛り上りをジャクソンよりはヴァン・ビューレンとの関連において捉え、その本質を、高まりゆく産業主義の中に、いち早く既成陣営を固めんとしたボストン・アソシエイツ等の特権的先行者に対し、土着小資本を有するアグレリアンが、事業に關する機會の均等を要求した運動として考えてみた。換言すれば、それはシュレジンガー・Jが考えたような都市労働者を主体とした急進的な運動ではなく、むしろ独立宣言以来の古典的民主主義の一変型であったと想定されるのである。

史林 五一卷三号 一九六八年五月

はじめに

アンドリュー・ジャクソンの二期にわたる施政時代と、これにつづくM・ヴァン・ビューレンの大統領時代を、いわゆる「コモン・マン」の興起の時期とする考え方は、過去一世紀の間ほぼ定説として受け容れられて来たといつて差し支えない。しかし、この「コモン・マン」が社会のい

かなるグループ、いかなる階級に、またいかなるセクションのものであったか、したがってジャクソニアン・デモクラシーの実体はいかなる性格のものであったかという点になると、まさに議論百出といった感があり、今日のアメリカ史学の、最も困難な争点の一つにあげられていることは周知の事実である。今世紀の初頭において有力であった「コモン・マン」は西部開拓農民という考え方は、程なく

東部都市労働者主体説にとって代られ、後者はまた、新興小企業家説によって反撃を受けるといふ有様であった。このような変転きまわりのない論争は、最近の何人かの学者達の系統的整理の努力にもかかわらず、なお紛糾を続けており、その一人であるジョン・W・ウォードの評言の如く、この時代の研究家達は、まさに群盲象を撫でるに等しい状況^②を呈しているといえるのである。

ところで、一九五〇年以降のアメリカ史の諸解釈はさらに大きな変貌を見せ始めた。即ち修正解釈派リヴィンジニストと呼ばれるひとびとの抬頭であり、それはアメリカ史の劇的なあるいは対立的な解釈を弱め、アメリカ国民の基本的同一性を強調せんとする傾向をもつものである。この再解釈の光が一度ジャクソン時代に投射される時、当然のことながらジャクソニアンの「コモン・マン」の運動としての価値は低められ、遂には運動の存在そのものをも否定しようとする動きが生み出されてくる。例えばリチャード・マッコイミックは、詳細な投票率の分析を通じて、選挙権が「コモン・マン」にまで拡大されたことがジャクソンをホワイト・ハウズに送った原因とはいえず、また有権者の大波が力強いデ

モクラシーの高まりを感じさせたような、ジャクソンの選挙などというものはありえなかったと結論しているし、また階級・宗教・人種等の諸要素から今少し多角的に、ニューヨーク州のジャクソニアンの実体を解明せんとしたリー・ベンソン^④は、ジャクソン・メンとその党派というものは存在したが、いわゆるジャクソニアン・デモクラシーというものには、実体的ない表現にすぎないという見解をすら提出している。これらのリヴィンジニストの武器は、これまでの諸種の仮説を試すべき膨大なデータの、統計学的、社会的な蒐集利用にあるといえよう。

リヴィンジニストの意図する方向や、そのデータの扱いは方のは非は別としても、歴史的事実を史料に則して精細に跡づけようとする努力は当然必要である。そうした方向にそつての特殊研究に対する要望が、今日その一つとしての地方史的研究の面に幾つかの労作を生み出すにいたった。先述のリー・ベンソンの他にニューヨーク州については、ウォルター・ヒュージンズの『ジャクソニアン・デモクラシーと労働階級』という論述^⑤が知られているが、ウォール街という金融資本の本拠地を抱え、全国政治の中心として

後のニュー・デイルや、現代のアメリカ資本主義と密接な関連をもつこの州は、このような研究のテスト・ケースとしては最も有効な対象であったといえよう。これとは対照的に、A・W・トンブソンの採り上げたフロリダ州は、当時なおフロンティアの状態の残存せるテリトリーであり、かつて州の軍事総督であったジャクソン個人の影響の強い、特殊な展開例として興味深いものがある。偶然の事ながら、M・H・ハラーの採り上げたメリーランド州は、南北両州の特色を併せもつ中間州として、前記二州の研究の空隙を埋めるに足るものとも見なしうるであろう。

このようにジャクソニアン運動の地方史的展開を見る時、ニューイングランドの中心として建国以来の伝統を保持し、しかも全国に先駆けて産業革命の波を経験し、かの文化的には「コモン・マンの固有の価値についての主張と密接な関連があった」といわれる、宗教上・文学上の知的覚醒の運動の盛り上りを見たマサチューセッツ州は、これまでの諸研究に対応して採り上げられるべき、充分なる価値と理由をもつものといえることができる。

端的にいつてマサチューセッツ州は、一八二〇年代を通

じて保守派の地盤であり、この地のジャクソニアンは終始苦境に立たされていたのであって、その運動も南部や西部諸州のそれとは自ら異なった動きを示し、それがためにかえてわれわれに、様な疑問とジャクソニアンの実体についての幾つかの示唆とをあたえてくれるのである。ジャクソンの就任に先立って、ボストンを中心に展開しつつあった産業革命は、この州の経済体制を漸次変貌させ、それに参加せる特権的資本家グループは、自己の利益を防衛するために保守陣営の政治家と結託して、恒久的な支配体制を形成しようとしていた。産業革命につきものの労働運動は一応発生がみられたものの、後に述べる如き諸種の事情から労働者自体の意識はなお低調であり、デモクラットは労働者層より充分な支持をうけるにはいたらなかった。それに比して、保守派は数的に多数であるばかりか、その指導者達の人格の卓拔さが、旧きリパブリカンの自由を楽観していた州民の信用をえて、全体としてこの州の保守的ムードを醸成していたのである。W・E・チャニングらの主唱せるユニテリアニズムは普及していたが、ひとびとの道德感、生活感情、日日の習慣等には依然として十七世紀以来のピュ

リータニズムの伝統が色濃き影を残していた。会衆主義教
 会維持のための強制課税も一八三三年まで続けられるとい
 う有様で、政教分離が最も遅れた州でもあったのである。^④
 にもかかわらず、一八三〇年代にいたるや、シェレジンガ
 ー・Jrがラディカリズムとして採り上げた活発なジャクソ
 ン・メンの活躍を生み出し、時を同じくして、ユニテリア
 ンからなせ異端の宣告を受けたトランセンデンタリズムの
 抬頭を見たりしたのは、一体いかなる事情によるものであ
 ったのであろうか。以下少しく詳細に、この州におけるジ
 ャクソニアンの動向を跡づけて見たいと思う。

① 史学史的なる種の論文としては、以下の三人のものを挙げておき
 た。

- Charles Crier Sellers, Jr., "Andrew Jackson versus the Historians",
 The Mississippi Valley Historical Review, Vol XLIV, March
 1958; Harry Stevens, Jacksonian Democracy 1825-1849 (Inter-
 preting and Teaching American History VI), 1961; John William
 Ward, The Age of the Common Man (The Reconstruction of
 American History V), 1962.
- ② John W. Ward, *ibid.*, p. 94.
- ③ Richard P. McCormick, "New Perspectives on Jacksonian
 Politics", American Historical Review, Vol LXV, Jan. 1960,
 p. 301.

- ④ Lee Benson, *The Concept of Jacksonian Democracy*, New-
 Jersey, Princeton University Press, 1961.
- ⑤ Walter Hugins, *Jacksonian Democracy and the Working
 Class: A Study of the New-York Workingmen's Movement
 1829-1837*, 1960.
- ⑥ Arthur W. Thompson, *Jacksonian Democracy of the Florida
 Frontier* (University of Florida Monographs, Social Sciences,
 No. 9), 1961.
- ⑦ Mark H. Haller, "The Rise of the Jackson Party in Maryland
 1820-1829", *The Journal of Southern History*, Vol. XXVIII,
 No. 3, 1962.
- ⑧ John W. Ward, *op. cit.*, p. 97.
- ⑨ R. W. Emerson が「キリシタンはより良き原則を有したけれど
 も、ホッブズはより良き人物を擁した」と評した言葉は有名である。
- ⑩ アメリカ学会訳編『原典アメリカ史』(昭和28年)第3巻(キリ
 シタンの発給)五七頁。
- ⑪ A. M. Schlesinger, Jr., *The Age of Jackson*, 1946, pp. 159-176.

(1)

マサチューセッツ州のジャクソニアンの動きについて語
 る前に、まずわれわれはいま少し具体的に、当時のマサチ
 ュセッツ州の一般的な社会経済的情勢について、理解を
 しておく必要があるようである。産業革命とそれに伴うイ
 ンダストリアリズムへの変貌とは、実際にはどのようなか

のであったのであろうか。またその変化は、州政治の上に一体どのような影響をもたらしたのであろうか。

一八二二年に始まる第二次米英戦争は、通常アメリカ自体の、イギリスからの経済的独立運動ともいふべきものを展開させたといわれている。この間、大西洋沿岸一帯に実験的に設立されていたマニユファクチュアは確立し、それ以前の英国による経済封鎖は、副次的な農村家内工業を刺激していた。一八二〇年から四〇年までの間に、アメリカ全体としてマニユファクチュアに従事した人口は、農業労働者の七九パーセントの増加に対し、何と一二七パーセントの増加率を示したのである。^①この傾向はマサチューセッツ州において殊に顕著ではあったが、この州にとってむしろ注目すべき現象は、同時に綿工業を基幹とするアメリカ産業革命の主役としての体制を他に先駆けて作りあげて行った事実である。その動きの一つは、国内第四位の人口をもつ大商業都市たるボストンより起った。すなわち従来海外貿易等を通じて巨額の資本を蓄積していた豪商グループ、なかんずく「ボストン・アソシエイツ」^②と呼ばれた一群の商業資本家達による、近代的綿工業への投資転換がそれで

あった。有名なウォルサムにおけるボストン工業会社の設立（一八一四年）を起源として、二〇年代には州北東部のメリマック河畔、及び西部のコネチカット河流域等に、すでに一〇〇以上の一貫工程による機械制綿工場の出現を見ていたのである。^③今一つの動きが州南部のタウントン・ヴァレイを中心に関連していた。これは主として農民・手工業者・小商人等の中産的生産者層の土着資本を基礎とし、綿及び鉄工業を通じて産業資本を形成しつつあった。いわゆる「プロヴィデンス型」もしくは「フォール・リヴァー型」と呼ばれる工業組織である。これらの製造工業は州議会の発する特別条例によって保護されており、マサチューセッツ州では、一八一〇年までの二〇年間に特許を受けたこの種の会社が僅か一八であったのに対し、一八三〇年にいたるその後の二〇年間には、実に二七九社の多きを数えているのである。^④かくてマサチューセッツ州は、一八二〇年代の中に、それまで貿易・造船等によって蓄積した資本を、ミル・機械制工場・銀行等の組織へと転用することによって、急速にインダストリアリズムへの変貌をとげつつあったといえよう。

しかしながら、当初に掲げた工業への就労人口の驚くべき増加率は、この時期のアメリカ工業の盛況を物語るよりも、むしろそれ以前の工業人口の貧弱さを示すにすぎない。

比較的発達の著しいこの州においてすら、三〇年代以前の内地部の大部分にあっては、依然農工は未分離の状態に置かれていたと見るべきであろう。住民の生活の中心はいわゆる「タウン」であつて、貿易商や手工業者といえども殆んどすべてがファーム・オーナーであり、季節的農夫の性格をもつていたのである。彼ら小土地所有者は、一般に社会上・経済上の理念的な単位であり、ジェファーンソンの農本主義の自由と独立の精神はなお、色濃く彼らの心を支配していた。当時の州工業労働力は、このような農村を主たる供給源としていたのであつて、その形態には概ね三つのタイプがあつたようである。すなわち第一は家内工業における部分的、または副次的な家族労働力であり、第二はジャーニー・マンがマスターの下で共に労働するマニユファクチュアにおける労働力で、職人達は普通各自が生産手段を所有していた。そして第三のタイプこそが、新たに抬頭せる産業資本家が直接生産手段を所有する機械制工場に

おいて、近隣農村からの婦人・子供によって果される、現代的意味における賃金労働力であつた。しかも現実にはこの三つのタイプは、ほぼ同一の階層より派生したものと見て相互に複雑に関連し合い、同時にそのいずれもがその地位に甘んずることなく、より高い社会層に上昇する夢と可能性を秘めていたのである。それ自体自立的かつ自由であつた半農半工のファーム・オーナー達は、自己の土着資本や工場用地を提供することによって、産業資本家の一翼に連なろうとしたし、第二のジャーニー・マンはやがてマスターとなつて独立の店を構えるか、あるいは蓄積した金で前者同様零細ながらも工場の共同出資者の列に加わるか、西部に土地を買うかすることを望んでいた。このような望みが決して無理な願ひではなかつた事は、例えば前述のタウントン・ヴァレイにおける「プロヴィデンス型」産業資本の形成過程に如実に示されている。「フォール・リヴァー工業会社」の創設者ダヴィッド・アンソニーは、自営農民の子から起り、水夫↓綿工場の徒弟↓職人のコースを歩み、その間に貯えた自己資本を株式購入に当てることによつて成功の端緒を掴んだのであるし、後年フォール・リヴァー

の商工業・金融業の諸方面に君臨したりチャード・ボーデンもまた、これと似通った経験を通じて世に出た人物であった。^⑥これら成功者の伝記が、州内の農民や手工業者の子弟の絶好の模範となっていたことは、容易に想像しうるところである。また第三の婦人・子供労働者にしても、イギリスのようなエンクロージャー運動による労働力の発生のみられなかったアメリカにおいては、農村の余剰の人口は殆んど存在しなかったため、経営者側は、その労働力確保を目的とした労務管理方式を採らざるをえず、その待遇法は比較的良好であった。この間の事情は、当時のヨーロッパ人視察者たるハリネット・マーチノウヤ、チャールズ・ディッケンズ等の手記からもうかがいるのであって、彼ら労働者は一定の期間働くと帰郷して結婚するか、西部へ移住するかしてしまい、紡織に従事する期間はせいぜい二ないし四年以内であったという。^⑦その生活は決して、チャールズ・ダグラス等が考えた程、「困苦と不衛生と悲惨にみちたもの」^⑧ではなかったのである。

このような情勢の下にしだいに明確な姿を見せ始めていた新経済体制は、一般に様様な不満を生み出してはいた。

しかし、このように流動し易い労働形態にあっては、彼らの中に固定した労働者階級としての社会意識が発達しなかったのは、むしろ当然であったといえよう。労働組合的なものがこれまでに無かったとはいえないが、それらはもっぱら熟練職人同士の排他的なクラブト・ユニオンの色彩の濃いものであって、特殊な利益の擁護に限られていたし、他には例えば、一八一九年の第二合衆国銀行の緊縮策による恐慌等^⑨が、一時的に生活苦をもたらしたような時にのみ、いささかの反撥心を誘ったに過ぎなかったのである。これらのユニオンは、真の賃金労働者たる婦人・子供を含んでいないばかりか、二〇〜三〇年代を通じて、「新移民はアメリカに同化せず、かつアメリカの勤労階級の地位を奪うものである」^⑩として、新来者排撃に一役買う有様であったのである。したがって、産業革命の進展に伴う社会の変化に応じて、政治面での積極性を見せはじめたのは、むしろ既得権の確保・拡充を目ざした資本家階級であり、彼らの活躍は、なお「タウン」を中心とした個人生活の枠内に依存しようとする一般州民を取り残してしまうこととなった。中でも前述の「ボストン・アンシエイツ」に属する面々は

漸次州議会に進出し、一八二二年にはボストン地区選出の三一議員の中、七議席をこのグループで占め、リーダー格のアボット・ローレンス、ネイサン・アップルトン等はマサチューセッツの保守派の領袖として、重きをなすにいたっている。当時はなお州内のジャクソニアンは、エドワード・イヴレットの言を借りるまでもなく、「少数のひとつの仲間」たるに過ぎなかった。したがって、これら企業家の代表達はその昔のリパブリカンの中、新経済体制に好意をもつ J・Q・アダムズやレヴィ・リンカーンの側に接近し、ジャクソン時代に入るや彼らと共に右傾して、ダニエル・ウェブスターを中心とするかつてのフェデリストと合流して行くこととなる。後にホイッグ党を結成するにいたるこの州の保守グループの提携は、かなり強固なもので、少なくとも一八三〇年代の前半期までは、州議会を支配したのみならず、法廷においても、J・ストーリーや P・O・サッカー等の彼らの一党が主導権を握っていたのである。

要するに、一八二四年以前のこの州におけるインダストリアルイズムの抬頭は、なお明確な形で一般州民の社会意識を刺激するにはいたらず、敢えて彼らの中に階級的自覚を

求めるとすれば、それはまさしく中産階級としてのそれであったとしか考えられない。後にカルヴィン・コールトンが叫んだ、「……彼らの行手には身分による排他的特権もなく、……中略……市民的・政治的不可能もなく、ひとつとは皆その才能と個人的努力によって、他のひとつと同様の良いチャンスを手に入れることが出来る……」という言に見られる、かの樂觀的自由の感情が一般を支配していたといえるのであろう。

- ① A. M. Schlesinger, Jr., op. cit., Chap. II, p. 9.
- ② 豊原治郎『アメリカ産業革命史序説』(昭和37年)第一章第二節、三六一―五八頁。
- ③ 同書第一章第一節、二〇頁。Clive Day によれば「設立年度別の各州綿工場設置リスト」参照。
- ④ Oscar and Mary Handlin, *Commonwealth: A Study of the Role of Government in the American Economy*, Massachusetts 1774-1861, 1947, Chap. VII, pp. 173-174. 「議会が殆んど注意深く請願書を調査しようとはせず、その創設者の意図を割引いて聞こうとする意志を示さなかった。ある開期中に拒絶された請願は、別の開期中に簡単に許可されたのである」。
- ⑤ Douglas C. Stenerson, "Emerson and the Agrarian Tradition", *Journal of the History of Ideas*, Vol. XIV, No. 1, 1953, p. 96.
- ⑥ 豊原前掲書、第一章第三節、六九―七〇頁。
- ⑦ 『原典アメリカ史』二五〇頁。

⑧ A. M. Schlesinger, Jr., op. cit., Chap. XII, p. 148.

⑨ George Rogers Taylor, A Brief History of the Second Bank of the United States (The Economic History of the United States, Vol. 4), 1951, pp. 3-4. 一八一七年に操業を始めた第二合衆国銀行は、初代總裁W・ジョーンズの無責任な貸し出し政策による破綻を收拾するため、一九年ラングトン・チーヴスの下に断固たる金融引き締め政策を実施した。すなわち「一八二〇年には銀行券は、一八年における八〇〇万ドル以上から約三五〇万ドルに引き下げられ、貸し付けは四、一一八万ドル以上から三、一四〇万ドルに減らされた」のである。そして「猛烈な負債が、事業会社と財政機關にこつて、破産を意味する欠乏の波と共に到来した」といわれている。

⑩ S. E. Morison and H. S. Commager, The Growth of the American Republic, Vol. I, II, 1942, p. 910. マサチューセッツ州がこの時代に受け入れた移民は、貧困で自作農にもなりえず、東部諸都市に留まって内地開発に従事したり、工場の不熟練労働者となった Irish が主体であった。なお、ここにいう「新移民」は歴史的には「旧移民」に属し、十九世紀後半からの東南欧よりの渡来者を指すものではない。

⑪ 豊原前掲書、第一章第二節、五五頁。

⑫ Russel B. Nye, George Bancroft, 1944, Chap. IV, p. 88.

⑬ J. W. Ward, op. cit., pp. 83-84.

(2)

前節で述べたように、大体において保守的な色調によつ

て彩られ、かつ一八二四年の大統領選挙には、州の有する一五票をことごとくJ・Q・アダムズに投じたこのマサチューセッツ州において、ジャクソニアン・デモクラットは、この形勢にどのように対処して行ったのであろうか。この場合、かのシュレジンガー・Jが強調した都市労働者は、果してジャクソニアン運動の主勢力たりえたのであろうか。これらの疑問を解くために、暫く州内の彼らの動きを追つて、いわゆるラディカリズムと称せられる程の運動の盛り上りが、どのような内容のものとして把握されるべきかという点まで、考察を進めて見たいと思う。

A・ジャクソンがホワイト・ハウスに登場した一八二八年以前から、徐徐にはあったが、州のジャクソニアンの活動が目立ち始めていた。恐らく政治上のチャンスを求める下心もあって、中央からボストンへやって来たダヴィッド・ヘンシユウやJ・K・シンプソン等の、商人でもあり銀行家でもあったひとびとがリーダーとなつて、市中の中産層や下層階級を組織化しつつあったのである。一方、かつて州知事代理を務めたこともある州高等裁判所のマーカス・モートン判事は、ファーム・オーナーや「タウン」のデモクラ

ット等の民主勢力をまとめて、ヘンショウ等のポストン勢力と提携しようとしていた^①。かくてジャクソンが当選するや、スポイルズ・システムの手はすべての有効な官公庁に及び、ヘンショウは功勞を認められて、マサチューセッツ州内での素嗜らしき支配力と党の指導権とを有する地位たるポストン港のコレクターにあげられた。ヘンショウは彼の机上から制御しうる強力なマシンを作り上げるべく、各郡委員会の議長に一党の税関の書記官や部長を配置し、自ら下部機構選出の実権を握ったので、州内の主な部署はすべてコレクターから発するの觀を呈したのである^②。この年、州知事の選挙に打って出たモートンは投票数の一二パーセントを獲得し、この数字は翌翌年の一八三〇年には三〇パーセントに上昇して、彼らごもはや、単なる「少数のひとびとの仲間」ではなくなったことを示していた。かかる成り行きから推察すれば、マサチューセッツ州に関する限りにおいては、コモン・メンの大波がジャクソンを大統領の椅子に押し上げたのではなくて、むしろ彼の当選の結果として、一党の活発化をもたらしたいように思われるのである。

しかしながら、これらの事が直ちに州ジャクソン・メンの

勝利であるとか、在来のマサチューセッツの政治的基調を一変させて、激烈な階級対立を惹起したとか考えるのは、やはり早計のそしりをまぬがれないであろう。むしろ三〇年代に入るや州内の工業化は一層激しく、かの「ポストン・アソシエイツ」の面々は、内陸地方にある自分達の綿工業の中心地と、ポストンその他の沿岸海港とを結ぶために、一八三〇年、ポストン・ローウェル間に初の鉄道敷設を計画し、以後の州内鉄道保有の主導権を握るにいたった。彼らの支配力はさらに銀行界、保険業界にも及び、四〇年代には早くも、州内総敷設鉄道哩数の三〇パーセント弱、ポストン全銀行資本の約四〇パーセント、州内全保険業の総資本額の三九パーセント等をその支配下に収めていたのである^④。このグループに数えられる一五家族は互いに姻戚関係を結んで、緊密なる組織と名門としてのアリストラシーを形成し、その重要メンバーの一人たるネイサン・アップルトンは、三〇年に連邦下院に議席を獲得し、保守陣營の強化に乗り出している有様であった。

高まりゆく「アメリカン・システム」からの抑圧が漸く各タイプの労働者に未来への不安を抱かせ、フォール・リヴ

ア方面においては、初期の零細な共同出資者たる小農民層がしだいに企業家的立場から締め出され、遂には工業労働力へと化成してゆかざるをえないような事情、あるいは三〇年前後に急に数を増した、貧困なアイルランド系移民の不熟練労働者化の現象等^⑥もあって、一般的に富裕階級との間の、経済的平等感の喪失が目立ち始めたのは事実であった。ニューヨーク州に続いて、この州にも最初の労働運動らしいものが起り始めたのは、このような社会情勢の反映であったといえるのではなからうか。一八二八年、州西部における農耕と牧羊業の活況がミルの労働力を奪い、物価が騰貴し、かかる状況を打破せんとする労働者グループの結成が見られた。^⑦さらに三〇年八月、州内の職工、農民、ミル・ワーカー等が労働者党を結成し、プリマス、ノーザンプトン、ハンプシャー等で三名の上院議員候補を指名するにいたつたのである。しかし、外見上の活況が直ちに労働者自体の階級自覚を示したものとは思われない。なぜなら、この労働者党の主張はむしろ穏健なものであり、労働条件の改善に関する幾つかの要求はあつたにしても、大体においては総括的な改革のプログラムを支持し、デモクラ

ットよりは、ホイッグ左派の富裕階級の政治力に依存している感があつたのである。すなわち、この党が指名した上院議員候補の一人は、当時はなお、「ボストン・アソシエイツ」のドットワイト家の一員と目されていたジョージ・バシクロフトであつたし、州知事候補に挙げられたヘンリー・シウは、同時に上院議員候補としてホイッグの公認を受けていた人物であつた。「われわれは水平論者ではない。われわれの目的は公共的善にある」という彼らの物足りない声明が、万事を物語っていると見て良いであらう。

この意識の曖昧さは、当時の労働者一般に通ずるもので、ヘンシヨウ・マシンの支配下にあつたデモクラット労働者として例外ではありえなかつた。その故にこそ、たまたまニューヨークにおいて、フリー・メーションの秘密暴露をめぐる殺人事件を契機としてアンティ・メーション党が誕生するや、ボストンの労働者達は動揺をきたし、しだいにデモクラットを離れて州アンティ・メーション党へと走つたのである。^⑧一八三一年、この党はベンジャミン・ハレットによって、福音教会的な情熱は有するものの、むしろ穏健な労働単位に基づいて組織化されたけれども、この第四党の出現は結果

としてデモクラット党の勢力を削減し、このため州知事選におけるM・モートンは、前年の得票の四パーセントを失ってしまった^⑭。このように州の現状に対する不満は確かに存在したが、労働者の意識は低調で、その時時の生活をおびやかした圧迫には抵抗したものの、未だ広範なる結束の必要性を、実感として受け容れる所まではいたっていないかったというべきであろう。したがって併立せる各党は同じ自己の陣営内にありながら、なお合併を考えようとはせず、むしろ他に対して自らのユニオンを防衛することに汲汲としていた有様であったのである。

かかる分裂を收拾すべく、一八三二年三月二〇日、前年末にプロヴィデンスで結成された、「ニューイングランド・アンシエイション」の第一回総会がボストンで開催された。この組織もまた、真の賃金労働者としてのファクトリー・ワーカーズやファーマーズを含まず、「御都合主義の政治的候補者を支持し、一般的にも堅固で誠実な実際上のプログラムをもたず、社会哲学ももたない^⑮」という点では旧態依然たるものであった。けれども、一日一〇時間労働の要求を公示し、闘争資金の値上げを可決し、ナショナルなユニ

オンの機構を求めて、各々のトレード・ユニオンの確立を推進しようとした点に関しては、注目に値する存在ではあったのである。この組織のリーダーとして活躍したセス・ルーサーやC・ダグラス等は、彼ら自身は労働者ではなかったが、デモクラットの改革者と一階級としての労働者の利害は異なるものであり、彼ら政党的無関心さに頼っての前進はありえない^⑯と信じて、労働者自身の一つの組織への結集を計ったのである。彼ら指導者達の思想は勇ましかったが、それが果して一般労働者の間に、どの程度浸透していたかはなほ疑問であるといわねばならない。

同年、第二合衆国銀行の再特許の可否をめぐる展開した大統領選挙は、A・ジャクソンの圧勝に終わった。国会を通過した特許継続法案に拒否^⑰をもって答え、政府預金を引き上げて各州立の「ベット・バンク」へ組み入れたジャクソンに対し、「猛烈な信用緊縮のみが、現存の中央銀行を潰すことの愚かさを、政府に納得させる^⑱」唯一の方法と信じたニコラス・ビドルは、一八三三年八月からクレジットの削減を断行し始めた。「……すべての他の銀行とすべての商人は、破産するかも知れない。しかし合衆国銀行に破滅

はありえないであろう」と記した彼の言は、その満満たる闘志を示すものであろう。三四年の中に手形割引率は一八〇三六パーセントに下落し、実業界に大きな苦しみをもたらした恐慌が到来した。ビドルのポストン支店の頭取こ

そ、かの「ポストン・アソシエイツ」のウィリアム・アツプルトンであり、新たな政府資金の貯蔵所となったマサチューセッツの「ペット・バンク」は、D・ヘンショウの僚友J・K・シンプソンのコモンウェルズ銀行であった。⑩ビドルのもたらしたこの恐慌は、皮肉にもデモクラットが非難した不当に巨大な、それだけに危険な、第二合衆国銀行の能力と権力、まさにそのものを誇示した結果となった。保守的傾向の大事業家達さえ漸次彼の敵に廻り、その後の地方銀行による信用ブームはジャクソン支持者を増加させた。このような経済情勢の下で、前述の「ニューイングランド・アソシエイション」の労働者委員会は、ポストンに「ジェネラル・トレード・ユニオン」を結成したが、それがこれまでにない政治色を帯びるにいたったのは当然であったのかも知れない。労働者は実用的な政策を要求し始め、政略に関心のないS・ルーサーや空論家のC・ダグラスは浮き

上り、翌三五年、ユニオンが解散するや労働者達は、デモクラットのM・モートンやウィリアム・フォスター等の指導に頼り始めたのであった。⑪

その頃、元来エモーショナリズムと偏見より成り立っていたアンティ・メーンソン党は、B・ハレットの組織作りにもかかわらず政治的に一貫性を欠き始め、ハレット自身も条件つきでなら、デモクラット党に復帰しても良いと考えようになっていた。この機運を察知したD・ヘンショウは、コレクターとしての権限を利用して両者の合併を成功させたのである。⑫この三四年の州知事選挙戦は、ホイッグのジョン・デーヴィスとデモクラットのM・モートンとの争いになったが、州西部の「タウン」を遊説するモートン派の弁士の中には、アンティ・メーンソン党のB・ハレットとジョージ・ベンクロフト、労働者党のリーダー、サムエル・アレン等の姿が見うけられたという。結果としてモートンは敗れ、労働組織の一部は未だデモクラットと正式に結合するにはいたらなかったが、この頃より漸く州内の反ホイッグ勢力の協調が、表面化し始めていたのは明らかであった。

叙上の如く、大体ジャクソン当選以後の州内の動きを追って来たところで、われわれは再び当初の疑問に立ち返って見る必要があるように思う。この間、確かに労働者は新しい動きを見せ始め、幾つかの組織を作り上げて来た。けれどもそれらを仔細に検討する時、いささかでもラディカルな表明を残したのは多くは非労働者たる労働運動家に限られており、労働者自体の腰は決して定まっていなかった。事実気づかされるであろう。この時期の改革運動の軸は、何といつてもデモクラットのモートン・ヘンシウ・ラインであり、そのモートンですら、八度の選挙にただの一度も勝利を得ることができなかったのである。これを南部・西部諸州のジャクソン・メンの華華しい活動と引き較べてみれば、マサチューセッツにおけるコンサーヴァティヴの、牢固たる影響力の根深さが計られるというものであろう。したがって、もしこの州においてラディカリズムの勝利というような、運動の盛り上がりがあったとするならば、それはやはり三〇年代も後半においてと考えるより他はないようである。これまでだとして来たジャクソン在位の八年間は、むしろデモクラットを中心とした州内革新勢力の、き

たるべき飛躍を予感した結集の時期であったといえるのではないであろうか。

- ① Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, pp. 88-89.
- ② Ibid., pp. 115-116. Nye によればコレクターの指令は次の如きノートで下部機構へ伝達された。コレクター州中央委員会と各郡委員会各々マニ委員会。
- ③ Ibid., p. 89.
- ④ 豊原前掲書「第一章第二節」五三一-五八頁。
- ⑤ T. C. Cochran, Basic History of American Business, 1959, pp. 133-134.
- ⑥ S. E. Morison and H. S. Commager, op. cit., Vol. I, II, p. 910.
- ⑦ A. M. Schlesinger, Jr., op. cit., Chap. XII, p. 149.
- ⑧ Edward Pessen, The Workingmen's Movement of the Jacksonian Era, 1956, p. 86 (American Problem Studies: Jacksonian Democracy, Myth or Reality? Edited by J. L. Bugge, Jr., 1963).
- ⑨ Ibid., p. 86.
- ⑩ A. M. Schlesinger, Jr., op. cit., Chap. XII, p. 149.
- ⑪ Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, pp. 89-90.
- ⑫ Ibid., p. 90.
- ⑬ Edward Pessen, op. cit., p. 86.
- ⑭ Ibid., p. 88.
- ⑮ George Rogers Taylor, op. cit., p. 6.
- ⑯ Ibid., p. 6. W. E. B. デュボイスは同趣旨の内容を W. アップルトンにも書き送っている。「……(恐慌による)広範な苦悶の実情が、国会になんらかの効果を与えるであろうということ以外は、何も考えていない」。ただし彼の本心であろう。

① Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, p. 116.

② Edward Pessen, op. cit., pp. 86-87.

③ A. M. Schlesinger Jr., op. cit., Chap. XIII, pp. 168-170.

④ Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, p. 109.

(3)

一八三六年、中央ではよりジェファーンソンの理念をいだけマーチン・ヴァン・ビューレン^①が後継者として登場し、ジャクソンの二期にわたる任期中に、漸くその基礎を固めたマサチューセッツ州の反ホイッグ勢力は、ここに一つの転機を迎えることとなった。長年ニューヨークの政界で活躍したヴァン・ビューレンの洗練された政治感覚が、教養あるニューイングランド人たるデモクラット・リーダー達にはより適合したものらしく、この州のジャクソニアンの命運は、ジャクソンよりはむしろ彼と共に動いてゆくこととなった。この場合、諸派統合の中心理念となったのは、中小土地所有者層を代表するルーラルなモートンの傾向であり、さらにそのなり行きを推し進めたのが同年のG・バンクロフトの正式の入党であった。彼はその出自から見れば明ら

かにホイッグの陣営に属する立場にあったが、R・W・エマソン等のコンコード・グループとは別に、ドイッ理想主義哲学に基づくトランセンデンタル・セオリーを組み立て、早くよりそれに基づくデモクラティックな政治的見解を表明して、ジャクソニアンの注目をひいていた。殊に一八三四年に刊行された『合衆国史第一巻』は彼に国民的名声をもたらし、その華麗なスタイルによる民主主義的ドグマは、読者をして「ジャクソニアンに投票した」^⑤ものと感じさせたのである。コンコードのひとびとと違って、その理論の故にかえって不安定な個人主義に陥ることを恐れ、敢然として政界に飛び込んだバンクロフトは、最初はアンティ・メイソン党もしくは労働者党と関係を持っていたが、今や同陣営の大同団結を志すデモクラットの新戦力となっていた。同党内において、ホイッグのD・ウェブスターやエドワード・イヴレットに匹敵する名士または論客たりうる者は、先ず彼をおいてはありえなかったのである。彼のエネルギッシュな活躍はしばしばホイッグを当惑せしめ、この年、知事候補モートンに有効票中の四六パーセントをもたらしたのであった。^⑦

一八三七年、前年の正貨支払令による不況が到来し、全国で数百の地方銀行が破産し、それらの銀行から貸出を受けていた企業の崩壊が目立ち始めた。このような経済的窮迫は、当然ホイッグに絶好の党政政策攻撃の口実を与え、州デモクラット内部の内紛を惹き起す結果を招いたのである。かくて数年前から始まっていたヘンショウとモートンとの溝が漸く決定的な差を見せ始めていた。元来銀行システムについても、負債による投獄廃止や選挙権改正の主張において、むしろリベラル・ホイッグに近い考え方をしていたヘンショウの生来の保守主義と、モートンの理想主義的・理論的デモクラシーとはあい容れぬものであったから、これまでは都市と田園のデモクラットを結合させる絆としてのみ、両者の提携が必要とされて来たもののように思われる。しかし今や夢想的政治理論家としても、選挙等における機械的党運営家としても、はるかに有能なバンクローフトを盟友としたモートンは、厄介な一時的協同者たるヘンショウ一派の締め出しを決意するにいたった。かくして同年、銀行問題についてのホイッグの攻撃に対処するため、デモクラット、旧アンティ・メーソン党、労働者党の三派

大集会がバンカー・ヒルに招集された時、数年間党のリーダーであったD・ヘンショウは、はつきり招待から除外され、B・ハレットの推薦にもかかわらず、大会は再びモートンを知事候補に選んだのであった。この現実の不況と党内の分裂は、旧アンティ・メーソン党と労働者党傘下の労働者に一時的な不安と動揺を与え、この年の選挙におけるモートンの得票は三九パーセントに減ったけれども、彼はこれを統一への足がかりと覘じ、来たるべき党の飛躍を期待していたのである。

一八三八年一月、モートンの要請によって党の中央首脳部は、ヘンショウに代えてポストン港のコレクターの地位をバンクローフトに与えた。彼は直ちに州マシンの徹底的改組に当り、田園と都市部の両デモクラットの連携を計り、旧アンティ・メーソン派及び労働者党の組合をジャクソニアン旗の下に統一することに全力をあげていた。彼はこのためにニューベドフォードの若きジャーナリスト、J・G・ハリスを招き、党の機関紙としての『ザ・ベイ・ステート・デモクラット』を発刊し、労働者のための会合の場所として新聞社内内に「リーディング・ルーム」を設けたりしてい

るのである。おりから打ち続く恐慌の前に、自力による組織能力を失って分裂しつつあった労働者党の主要人物と、合併後しだいに消滅しつつあった旧アンティ・メーソン派の大部分は彼を頼って集まり、ヘンショウ派のブレインを構成していた者の多くもまた、この新領袖に帰順した。もちろん失意のヘンショウのあらゆる妨害が試みられ、新しい党機関紙と闘う目的のために『ザ・ソーン』が発行されたりしたけれども、これに注ぎ込んだ無益な出費のためにヘンショウの銀行は破産し、政治家としての彼の力は急速に衰えていった。彼はもはやバンククロフト・モートン・ラインに対して何らの脅威も与え得ず、ここに党のコントロールは完全なものとして確立したのである。この新体制の下に一八三八年の知事選挙において、党は再び四四パーセントの票を獲得した。前年の嵐は見事に克服されたのである。

この年、苦戦の末辛うじて知事の座を保ったホイッグのE・イヴレットは、一八二六年以来ボストンに設立されていたアメリカ禁酒協会の圧力を受けて、一日に一五ガロン以下で酒類を売ることを禁じる「リキニール・ロウ」にサイ

ンをした。労働者の不満は非難となってホイッグに集まり、翌三九年の選挙でモートンは初の知事の座を獲得した。マサチューセッツ・デモクラットにとって、最も輝かしい時代が到来したのである。とはいえ結果としてのこの勝利は、当時賞揚された程の内容を伴うものとは思えない。確かに「リキニール・ロウ」の否定は、コモン・マンの生活感情の側に立つ主張ではあつたけれども、それはむしろ選挙戦における好餌として利用されたとの印象が強く、それによつて中産層に企業参加の機会拡大を約束したわけでもなければ、これまで党とは別個の立場から投票していた或種の労働者を、党の固定した部分として統合しえたわけでもなかった。それは賢明にもバンククロフト自身が理解した如く、単に「都市の労働者がサロンの一隅で一杯やることを好み、彼らからその楽しみを取り上げなかつた」というだけの理由であり、簡単にジャクソニアンの原理の勝利とはいきることができない。

ところで、かのA・M・シュレジンガー・Jrが強調したマサチューセッツ・ラディカリズムの昂揚とは、まさにこの三〇年代後半を指しているといつて良い。しかしながらラ

ディカリストのリーダーとして彼が列挙した人物の中、ロバート・ラントールやB・ハレットは、明らかに政治的野心に基づいて行動した、とかくの批判の多い男達であり、アマサ・ウォーカーやウイリアム・フォスター、A・H・イヴレット等は、彼ら自身は非労働者たるボストンの商人やジャーナリストであり、社会主義者とは別種の、単なるバンクロフト・モートン・ラインの闘将というにすぎなかった。「一八三六年の州議会の投票はラディカリストの強力さを示した。……中略……D・ヘンショウの哲学からジャクソンのそれへの変形が殆んど完成され、数年前まで少数であった党は強力な候補者を送り込むことができた」というシュレジンガー・Jrの記述もまた、ラディカリストなるものが、D・ヘンショウ一党のデモクラット右派に対する、急進派の意味にすぎない事を示しているように思う。とするならば彼のいうラディカリズムとは、とりまなおさずこの時期の党勢を支配したバンクロフト的理念につきるのであって、一部リーダー達の過激な反資本主義的の揚言を、そのまま鵜呑みにすることこそ、真実を誤るものというべきであろう。

① Robert V. Remini, *Martin Van Buren and the Making of the Democratic Party*, New York, Columbia University Press, 1969, p. 126.

② 彼の父 Aaron は強固なフエテリリストとして政治的保守主義を支持し、ユニテリアン協会の名誉会長としてボストン社交界の名士でもあった。また彼の配偶者は「ボストン・アンシニエン」の有力者 Jonathan Dwight の娘 Sarah であり、人々は彼を「ウワイト財閥の一員として遇い、ホイッッグの領袖 Edward Everett は彼の終生の親友であった。なお彼の再婚者 Elizabeth Davis は、やはりホイッッグの知事経験者たる John Davis の妹であった。(Russell B. Nye, op. cit., Chap. III, p. 75, Chap. IV, pp. 87, 120 etc.)

③ Harvey Wish, *The American Historian: V. George Baneroff and German Idealism*, 1960, p. 81.

④ 彼の演説としては、一八二六年の独立記念日に当り「Northampton において」デモクラシー、決定された譲歩の余地なきデモクラシーを強調したもので、あるいはホイッッグを「金権党」ときめつけ、デモクラシーを極端にも「実践的キリスト教」と定義づけた三六年の *Spiritual Review* における演説等が有名であり、三一年の一月 *North American Review* に掲載された銀行問題に関するジャクソン支持の論議は当時の人士の注目を集めた。

⑤ Michael Kraus, *A History of American History*, 1937, p. 229: R. B. Nye, op. cit., Chap. IV, p. 106.

⑥ 一八三二年当時、彼は未だ政治家たるべきか学者たるべきかに悩んでいた。その頃、未発表に終わった一文の中で、彼は行為の世界における学者の機能を三つの型に分けて考えている。すなわち、「その道の発展しか考えようとしてない」「the Lowest」国民の進歩について考えない「Higher (Scholar-Politician)」世界的に重要な真理を表明

し、自己の運命を支配する活力を発見せんとする高遠なる自然の憧憬としての“the Highest”である。この考え方の成熟の結果、自らの“Highest-Scholar”の役割を選んだものと考えられる。(Russell B. Nye, op. cit., Chap. IV, pp. 93-94.)

⑦ Ibid., p. 112.

⑧ Joseph Dorfman, “The Jackson Wage-Earner Thesis”, American Historical Review, Vol. LIV, No. 2, Jan. 1949, p. 301.

⑨ Russel B. Nye, op. cit., Vol. IV, p. 114.

⑩ Ibid., p. 114. モーガンは次の如く述べている。「われわれは今や危機に陥つてゐる。それはすべのわれわれの知恵とエネルギーとを必要としてゐる。われわれは果して地盤を維持することができるであらうか。もしそうしうるならば、この恐慌が過ぎ去つた時、われわれは臨進するものができると進言なす。」

⑪ Ibid., p. 116.

⑫ Ibid., p. 118.

⑬ Ibid., p. 121.

⑭ Edward Pessen, op. cit., p. 91.

⑮ Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, p. 121.

⑯ A. M. Schlesinger, Jr., op. cit., Chap. XIII, p. 176.

(4)

マサチューセッツのジャクソンニアンが苦難の末獲得した勝利の期間は、決して長いものではなかつた。共に民衆の友であることを標榜し、空虚な宣伝戦に終始した一八四〇

年の大統領選挙において、ヴァン・ビューレンのハワイ・ハウスにおける汚職の噂が州の労働者を動揺させ、さらにデモクラットの準機関紙と目されていた『ボストン・コータリー・レビュー』が、一党オレステス・ブラウンソンの「労働者階級」と題する過激な論説を掲載し、なかなく「私有財産の世襲相続に関する諸法の廃止」の主張^①、デモクラットに心を寄せていたミドル・クラスに大きなショックを与えた。ホイッグはここぞと非難を集中し、党に「ジャコバンの、反宗教的」アナーキスト^②としてのレッテルを貼ってしまったのである。モートンやバンククロフトは極力その否定に努め、挽回を策して遊説を試みる一方、『ザ・ベイ・ステート・デモクラット』を通じて、英国の金権階層より二五五万ドルの財政的援助を受けていたホイッグ^③を攻撃したが、D・ウェプスターの巧みな弁舌によって党はしだいに追ひ詰められ、敗勢は歴然たるものとなつた。果して州においてモートンはJ・デーヴィスに惨敗し、大統領の椅子もまた、「ティピカノー」・ハリソンに奪われてしまったのである。

再びホイッグの支配が始まって、バンククロフトはポスト

ン・コレクターの地位を追われ、ホイッグのレヴィ・リンカーンが交替した^④。そしてここを中心に築かれていた州デモクラットのマシンは、徹底的に分解されてしまったのである。バンククロフトの好意によって税関の吏員を勤めていたナサニエル・ホーソンが職を失い、彼らコンコード・グループの実験農場たるブルック・ファームへ引き取られていったのも、この時のことであつた。翌四一年、ハリソンが急逝するやジョン・タイラーが昇格してホワイト・ハウスに入った。ホイッグでありながら党内で孤立していた彼は、しだいに南部デモクラットたるJ・C・カルフーンに接近し、彼らを中心とする別のデモクラット党を再建せんと計画し始めたのである。この情勢は州外での動きとはいひながら、カルフーンの対抗者たるヴァン・ビューレンにすべての命運を賭けていた州デモクラットにとつて、前途の暗さを予見させる悪兆には違ひなかつた。果して、先に失脚した答のD・ヘンショウはこの一党に頼つて巻き返しを計り、ワシントンで彼に従う連中を結集しつつあつたのである^⑤。これに対しモートンやバンククロフト等は、四一年の州知事選挙に悔り難い進出ぶりを示した奴隷制廃止論者のリバティ

党に着目し、旧労働者党のJ・G・ホイットニアを通じて、その主唱者W・L・ガリソンらに接近した。バンククロフト等はこれまでの逡巡を捨てて、党を奴隷制問題をも含めた、広い一線に整理し直す運動に着手したのであるが、その必要性を悟る者はなお少かつたといわれている。

一八四二年の知事選挙では、J・デーヴィスもモートンも共に決定的な得票を集めえなかつた。州法に基づいて最終決定は立法部に移されたが、リバティ党の支持分がデモクラットの側へ流れて、モートンは二度目の幸運な勝利を掴んだ^⑥。とはいえ、少数派知事たるモートンはその在任期間中、ホイッグとリバティ党双方の反対を受けて、殆んど何の実績もあげることができなかった。さらに悪いことには、この苦闘の最中に、翌年の大統領選挙の瀬ぶみにJ・タイラーがポストンを訪れ、ヴァン・ビューレンと結んだモートン＝バンククロフト・ラインの勢力は、もはや過去のものとなつたと考えたR・ラントールやB・ハレット等はいかゞの盟友を見捨ててJ・タイラーに頼つたのである。これによつてマサチューセッツ州にもタイラー＝カルフーン系の勢力が割り込み、D・ヘンショウは海軍長官に、背反

者のR・ラントールはポストン・コレクターとなった。したがって、州のデモクラット党は、今なお田園タウンの代表を握っているモートン・バンククロフトの派と、新たに支配的地位を奪ったラントール・ヘンシウ一派とに分裂してしまつたといふ。この分裂は全国的に見れば、もともと党内に存在したアグレリアンの北部と、プランターの南部の分裂であり、ジャクソンの後継者を争つたヴァン・ビューレンとカルフーンとの系列的対立であつたのである。^⑤このアメリカ的なセクシヨンの対立を抑え、拡大する産業主義の大渦の中で、自己が内包せる多種多様なグループの欲求に実現の機会を与えるべく、反特権の方向へと戦線を整えていったのがジャクソニアンの運動であつたとするならば、この年の分裂こそ、事実上のジャクソン時代の終焉の用件であつたといえるのではあるまいか。四〇年代の一般の注意が、領土的拡大、奴隸制の可否、セクシヨン間の闘争等の問題へとむけられていたのは明らかである。一八四三年、ポルチモアで行なわれたデモクラット党の大統領候補指名全国大会において、テキサス合併論を無視したヴァン・ビューレンは、対立候補たるミシガンのルイス・キャッスに肉薄さ

れて、党はデッド・ロックに乗り上げてしまつた。マサチューセッツの代表として熱心にヴァン・ビューレン支持を表明していたバンククロフトが、結局は妥協的候補ジェームズ・K・ポークを推さざるをえなかつたのも、前述の社会的関心の変化によるものであつた。州内においてもモートンは敗れ、知事選挙に賭けた生涯一六回の戦いの中、その一四回を敗北の中に失う結果に終つた。^⑥第三党ながらリベティ党が著しく党勢を拡張し、やがて奴隸制の問題が、唯一最大の争点となるであろう気配を示したのである。翌四年、大統領選挙におけるアメリカ史上最初のダーク・ホースであつたJ・K・ポークが勝利を飾つた。彼によつてバンククロフトは海軍長官として入閣し、ポストンのコレクター・シップはモートンにあたえられて、州のデモクラットは再び日の目を見たけれども、それはもはや、三〇年代のようなジャクソニアンとしての方向を持つものではなかつたといえよう。

① A. M. Schlesinger, Jr., op. cit., Chap. XXIII, pp. 299-304.

② Ibid., p. 302.

③ Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, p. 124. 英國の援助者達
は、州の保障さえあれば、ホイッグ勝利の暁にはこの二五〇万ドル

から約二〇パーセントの利率が上るであらうと期待していたといわれ¹⁰。

④ Ibid., p. 125.

⑤ Ibid., p. 126.

⑥ 有名なガリソンの『リムレーター』誌は一八三一年に創刊され、同年にニューイングランド反奴隷制協会が生まれていた。バンクローフトはその初期の誌上に早くも論文を発表していたし、三七年のヘンショウ派退放の時点でも J・G・ホイットティアが、奴隷廃止をデモクラット党綱領に加えるよう提案したこともあったが、政治上の効果が未知数であるという理由で公認はされていなかった。

⑦ Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, p. 128.

⑧ Charles M. Wilsey, *The New Nation 1800-1845*, 1961, pp. 100-106.

⑨ Harry Stevens, op. cit., p. 82.

⑩ Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, p. 130.

む す び

これまでの考察から、先ず时期的には、州ジャクソニアンの運動を大きく三期に分けて考えて見たい。すなわち一八二四年の大統領選挙の頃から、ジャクソンの二期にわたる施政時代をその抬頭期とし、ヴァン・ビューレン登場の一八三〇年代後半を盛期、一八四〇年以後を分裂と政策の転換期とする見方である。この運動の中心であったデモクラ

ット党の基本姿勢を統一して、反ホイッグの諸勢力をその傘下に吸収し、かつての協同者たるヘンシヨウ・ラインを敢えて排除しながらも、遂にモートンが知事の座を獲得した三〇年代後半が、そのピークであったとする考えはほぼ誤りのないところであらう。本文中にも述べた如く、この時期におけるヴァン・ビューレンと G・バンクローフトの占める役割が、極めて大であったことはいうまでもあるまい。

次にこの運動を盛り上げたいわゆる「コモン・マン」についての疑問であるが、マサチューセッツ州のような、保守性の根強さのため民主勢力の立ち上りの遅れた地域にあっては、彼らは当初から敵対すべき大目標をもっていたのである、異質の各グループといえども、少なくとも反ホイッグという共通の場においては、互に提携しうる可能性を持っていたといつて良い。^⑪したがってその提携が一応実現した三〇年代後半にあっては、「コモン・マン」の広がりほまさしく「反ホイッグの総体」と称して差し支えないが、この運動の本質を探るためには、その広がりよりも中核となつた社会層ないしはグループを把握することの方が、むしろ必要であるように思う。

先ずシュレジンガー・Jrが強調した都市労働者層であるが、彼らを指導したS・ルーサーやC・ダグラス等の労働運動家の描いていた、空想社会主義的な、あるいは反資本主義な社会的プログラムと^②、労働者層自体の意識とは本来別物であったことに、あらためて注目しておかねばならない。当時の労働形態の旧さと、なお本質的には地方的かつ散発的であったユニオンの性格^③などからくる州労働者の社会意識の曖昧さは、シュレジンガー・Jr自身も認めているところであり^④、この時代の労働者が気まぐれで、少しの噂にも簡単に動揺した事実は、本稿中にもしばしば記した通りである。彼らにはリーダー達のラディカルな思想を受け容れるだけの素地は生れていなかったし、ジャクソン・メンに対しても、たまたま共通の敵に対して利害が一致した時、一時的に協同の歩調を示したものの、決してそのまま民主的な政治連合の一部として同化してしまふことはなかった^⑤。こうした彼らの時時の不安定な動向からして、とうてい改革運動の中核とはなりえなかったと見て良いであろう。

また、デモクラットの中にも都市商人、地方銀行家、ジャーナリスト等のグループがあったが、彼らの中、単に政治

上の足がかりを求めて策動したD・ヘンシユウの一派や、もともと反動的な要素をもって出発したB・ハレットが率いる旧アンティ・メーション派のひとつとは、とかく一貫性ないしは純粋性を欠き、所詮はこの運動の脇役でしかなかった。これらに対して三期を通じて変らず、常にその主勢力を構成していたのは、モートン揮下の田園地区タウンの小土地所有者層であったと考えられる。ジェファーソン以来のアグレリアニズムの伝統を受け継ぎ、各々に蓄積した土着小資本を擁して、新事態の社会にヨーマンのアイデアを適合させようとした、この半農的プチ・ブルジョワジーこそ、少なくともこの州におけるジャクソニアンの、主流となった階層であったと推測できるのである。

したがって、州ジャクソニアンの基本的原理は、この地方において殊に著しい、産業主義の抬頭という新情勢に直面した彼らモートン・バンクロフト派のひとつが、いち早く既成陣営を固めんとしたボストン・グループ等の特権的先行者に対し、事業開発に関する機会の均等を要求したことにあり、彼らを中心とする多くの精神上の企業家達の希望を妨げようとした、種種の特権に対して抗争したとこ

American People, 1942, Part II, XVI, p. 374.

- ④ A. M. Schlesinger, Jr., op. cit., Chap. XII, p. 156. 彼は一八三三年十二月三日附の Washington Globe 紙上の Amos Kendall の一文を引用している。すなわち「すべてにわれわれは、男子労働者が彼らのマスタアの意志に従って、投票用紙を駆使していることを聞かなくては」。

⑤ Edward Passen, op. cit., p. 91.

⑥ Russel B. Nye, op. cit., Chap. IV, p. 119. 「この原則は独り」

ンントロフの著述は全く George Ripley, Theodore Parker, R. W. Emerson 等と同様であった。——中略——ただ彼らは書物と研究の中に没頭し、講壇上から自由を語り、自らの沈思と議論をジャーナルに展開したひとつとてであった」。

- ⑦ Ibid., p. 124. この時バンタロフは「ブラウンソンは彼の幻想的信条にまっぴりわれわれに大損害をあたえた」と嘆息している。

⑧ Joseph Dorfman, op. cit., p. 304.

(千葉県立国分高校教諭)

the setting sun, inquiring after the health of the latter” and the Chinese Emperor Yang-ti 煬帝 was not pleased with it’ have led Japanese historians to suppose that Japan tried to assume an equal, or more than equal, diplomatic status with China, and Yang-ti was not pleased this Japanese attitude.

In this traditional interpretation is found the so-called ‘ Japanese historical view’ in which ‘ the place of the rising sun=east=Japan’ and ‘ the place of the setting sun=west=China’ are taken as the self-evident truth. The Chinese idea, however, could be identified with that of our country. According to the Chinese idea, ‘ the place of the rising sun’ and ‘ the place of the setting sun’ mean the utmost parts of the world. ‘ The Emperor of the Middle Kingdom’ Yang-ti ruling the world did not regard himself as ‘ the Emperor of the place of the setting sun’; and the Chinese idea would not recognize the chiefs of other races as ‘ the Emperor’.

The Japanese credentials had no common sense for the Sui 隋 dynasty; but, as the Japanese King sent a messenger and ‘ payed a tribute’, the dynasty sent P’ei-shih-ch’ing 裴世清, the messenger of ‘ süan-yü 宣諭’.

The Jacksonian Movement in Massachusetts

by

Ryoichi Egawa

Especially in the field of the regional history, remarkable efforts have been made since 1950 as a means of practical explanation of the Jacksonian movement. The state of Massachusetts, though influenced by the economical change such as the industrial revolution which started earliest in the country, was still politically under strong control of conservatism. It was natural that the Jacksonian movement here was different from those of the Southern and the Western states. I thought in this article that this movement was rather uplifted by M. Van Buren than by Jackson, and that it was the movement in which the Agrarians with small property in their own farms demanded the equal opportunity for business against the privileged forerunners of Boston Associates and others who tried to guard their camp in the rising industrialism. In other words, it is supposed that it was not the radical movement dominated by the urban laborers, as is suggested by A. M. Schlesinger, Jr.,

but one of the various forms of classical democracy advocated since the Declaration of Independence.

Retail Trade Areas of the Central Place

—Its distribution and hierarchical structure—

by

Fujio Suhara

Through analysing the retail trade areas of the central place on each rural settlement, this article attempts to explain its minute distribution structure which has been unable to be acquired.

At first, three factors which determine the distribution of retail trade areas of the central place should be as follows; (1) centrality conditions, (2) traffic conditions, and (3) consumers' response conditions. Then the hierarchical structure of distribution, which is found among those trade areas according to various goods that should be formed by these factors, is to be presumed.

The result of the author's investigation into the actual condition at the inland area of eastern Harima 播磨 province in Hyôgo 兵庫 prefecture has brought the real existence of the hierarchical structure of the distribution of retail trade areas which agrees with his presumption, and the close relation between consumers' response conditions and distribution of the trade area of each goods.

Of a So-called Internal Character in Agatanushi's

県主 Official Duty

by

Naokichi Niino

There has been a theory that Agatanushi 県主 was a lord of the land which was directly controlled by the ancient Imperial family and that he was also Tomonomiyatsuko 伴造 who was an agency of the Imperial household management. But in case the Agatanushi's territory is under the Imperial direct control, it follows that there is the Imperial private